

# 日本における倭寇研究の学説史的検討

中田稔\*

はじめに

## 1. 戦前の研究

- i. 黎明期の研究
- ii. 1910-20年代の研究
- iii. 1930年代以降の研究

## 2. 戦後の研究

- i. 1970年代までの研究
- ii. 1980年代以降の研究

おわりに

## はじめに

本報告は、日本と韓国で認識が異なる史実のうち、倭寇に関する日韓の対話に資するべく、日本側における倭寇への視線と研究成果および論争について、近代以降現在に至るまでを通観するものである。日本における論争をたどることが本報告の主題であるので、渉猟し検討する論著は、近代以降日本において発表された日本語によるものとする。

周知のように倭寇は、いわゆる前期倭寇(または14・15世紀までの倭寇)と後期倭寇(16世紀の倭寇)に大別されるが、本共同研究の趣旨および研究協力者諸氏との分担の関係から、本報告で扱う対象は、主に前期倭寇に関する研究に絞る。倭寇はさまざまな問題関心(たとえば戦前においては海賊史、戦後においては対外関係史または日韓関係史、近年は海域アジア史)に沿って扱われてきたため、どこまでの研究論著を倭寇に関するものとして扱えばよいのかについては、曖昧な部分がある。特に日韓関係史や海域史との境界線は、きわめて曖昧となることを予めお断りする。

次に、研究史の時期区分である。日本における倭寇研究はすでに1世紀を超える蓄積があり、中世後期の対外関係史全体に枠を広げれば、その研究史を扱った論考だけでも十指に余る。報告者は、

---

\* 神奈川県立茅ヶ崎高等学校教諭

そのうち〔秋山謙蔵1939〕〔田中健夫1959〕〔田村洋幸1992〕〔関周一1994a〕〔同1994b〕〔楠木武2000〕〔橋本雄2003〕〔荒木和憲2007〕〔関周一2008〕〔橋本・米谷2008〕を検討した。その結果、戦前については、新史料の活用や影印本の刊行による史料の普及を契機として研究が進捗してきたことを踏まえ、「黎明期」「1910-20年代」「1930年代以降」の3期に区分した。戦後については、1980年代すなわち冷戦構造崩壊前後を画期として「海域アジア史」という新たな枠組みが登場したので、ここを境に前後に分けることが穏当と考え、「1970年代まで」「1980年代以降」に区分した。

叙述にあたっては、現在日韓両国間で見解の相違が認められる論点、特に倭寇の主因および倭寇の主体の問題を意識しつつ、日本側の研究状況の推移を書き進めたい。

## 1. 戦前の研究

戦前の研究は、二つの制約のもとで行われていた。その第一は、当時の大日本帝国が欧米列強を追いつつアジア地域に領土を拡張していくという時代風潮の影響であった。田中健夫は、戦後14年を過ぎた時点においても倭寇を「その活動を輝かしい日本人大陸発展史の一頁でもあるかのように考えるのが普通」(下線は引用者)〔田中健夫1959〕と述べている。戦前の倭寇研究は「倭寇の活動を、日本人の海外発展の具現と見る指向性」があった〔関周一1994b〕のである。各論考を参照すると、倭寇の活動を、日本の国威発揚の手本として賛美する傾向にあったことは否定できないだろう。第二は、日本国内に倭寇の活動を記した史料が少ないという研究上の制約であった。前期倭寇に関していえば、詳しい情報は高麗・朝鮮王朝側の史料にあるので、朝鮮半島を植民地化する過程で新しい史料が利用できるようになってはじめて、研究は進んだ。

そのような制約はあったが、管見の限りでは、戦前においても研究者は史料と真摯に向き合い、実証的に倭寇を含む対外関係を究明しようとしていたと考える。

### i. 黎明期の研究

近代日本の倭寇研究は、海外に発展する日本の海賊を追求しようという動機から、海賊史研究の一環として始まったようだ。このようなトーンは、日清戦争・日露戦争を経て南樺太・関東州そして大韓帝国を植民地化するなど、領土を拡張していた当時の日本の時代風潮からくるものであった。

まず、菅沼貞風は著書『大日本商業史』中の「海賊大將軍及『ばはん船』」という章の中で海賊衆と貿易の関係を論じた。ここでは、朝鮮と貿易を行なう海賊衆として、近世以来参照されてきた申叔舟『海東諸国紀』所載の人物を挙げている点が注目されるが、この他の参照史料のなかには『南海治乱記』のように信憑性に疑問符がつくものもあった〔菅沼貞風1892〕。次に、星野恒は奈良朝以後の海賊を論じ、その中で朝鮮への「侵掠ハ、彼国ノ歴史(東国通鑑)ニハ高麗忠定王二年二月ニ始マルトス、其文ニ『…倭寇之興始此』トアリ…」と述べ、倭寇の活動がこの年(1350)に始まったことに言及、それ以前の侵掠行為は新羅時代に始まるという認識も示し、倭寇と海賊を区別している〔星野恒1894〕。また、

久米邦武は奈良朝以来の海賊衆について述べ〔久米邦武1911〕、渡辺世祐は毛利家の史料を用いた海賊史の研究を著した〔渡辺世祐1911〕。海賊の研究として奈良時代から敷衍しているのが黎明期の研究の特徴で、その中で倭寇は明や朝鮮での限定的な呼称として用いられるようになったようである。

朝鮮半島側の史料が乏しいことが研究上の大きな制約であったことは、応永の外寇について林泰輔が「単に、朝鮮人の来寇」と推論していた〔林泰輔1897〕のに対し、「蒙古、朝鮮人の聯合軍」とした論考もあり〔中野礼四郎1897-98〕、その実態がまだ解明されていなかったことから明らかである。

## ii. 1910-20年代の研究

20世紀に入り、大韓帝国の保護国化さらに植民地化への動きと並行して、倭寇研究は本格化する。1909年に刊行された『高麗史』三冊が活用され始め、さらに『朝鮮王朝実録』が閲覧可能になったことで、朝鮮半島を侵掠した倭寇の研究は急速に進んだ。三浦周行によって『老松堂日本行録』『慶尚道地理誌』の解題がなされたことの意味も大きい。

この時期、倭寇に関する数多くの論考を発表したのは後藤秀穂(肅堂)である。後藤は倭寇研究における中国・朝鮮半島史料の価値を第一とし、新羅時代にまでさかのぼって検討を行い、高麗高宗10年(1223)の「倭寇金州」以降、13世紀前半に倭寇が「やや完全なる形式を備へて世に出現」したことに言及した〔後藤秀穂1914〕。現在われわれが〈初期の倭寇〉などとして理解する倭寇への言及である。次に『明実録』をもとに嘉靖の倭寇について検討し、中国人が中心であることにすでに言及している〔後藤秀穂1915a〕。このような実証性の一方で、倭寇には「殖民性を欠くという日本人の欠点」が見られないと述べ、これを礼賛する後藤は、典型的な戦前型の研究者と言える〔後藤秀穂1915b〕〔同1919〕。一方後藤は倭寇の風俗についても考察を行なった〔後藤秀穂1928〕が、こちらは16世紀の倭寇が中心であった。この時点では、〈前期倭寇〉〈後期倭寇〉の区別はまだなされていなかったのである。

朝鮮半島への倭寇に対する本格的な研究の嚆矢としては、瀬野馬熊と三浦周行を挙げたい。三浦は、朝鮮半島側の史料—特に『朝鮮王朝実録』を用い、応永の外寇の理解について、それまでの誤りをただした〔三浦周行1916〕〔同1926〕。そして、朝鮮側が倭寇の根拠地とみていた「三島」およびそれ以外の地域の海賊と、朝鮮王朝側の対日通交策の変化を追った。三浦のこの論考は「朝鮮の〈倭寇〉」という論文題目からわかるように、純粹に朝鮮王朝の史料をもとに構成されているが故に、内容は今日〈前期倭寇〉と認識される倭寇に限定されている。具体的には三島をはじめとする倭寇の根拠地、朝鮮王朝側の倭寇防御策、対日貿易、授函書、文引、開港場としての三浦、孤草島での釣魚、癸亥約条といった、戦後から近年にいたる中世後期日韓関係史の主要テーマがほぼ盛り込まれている点が注目される〔三浦周行1917〕。瀬野馬熊も、『朝鮮王朝実録』をもとに朝鮮王朝初年の倭寇懐柔策及び対策としての水軍整備についてまとめた〔瀬野馬熊1915〕。両氏の研究は『朝鮮王朝実録』などをもとに実証的に行なわれ、この前後の研究にあるような倭寇に対する思い入れがまったく見られない点の特筆される。また、瀬野が「嘉靖以後における支那の倭寇はまた別問題なり」と述べていることに留意したい。先ほどの後藤の(嘉靖の倭寇は中国人が中心であるという)言及とあわせれば、〈前期倭寇〉と〈後期倭寇〉が質的に異なることについての自覚が、複数の研究者の間で固まりつつあったことがわかる。さらに

後藤が指摘した13世紀の倭寇のうち、中村栄孝は文永・弘安両役間の倭寇について〔中村栄孝1926〕、『高麗史』を用い日麗関係を分析した青山公亮は主に13世紀前半の倭寇について言及している〔青山公亮1921〕〔青山公亮1927〕ことも押さえておきたい。

一方、倭寇を指揮する主体は征西将軍府であるとする藤田明の見解〔藤田明1915〕は、以後長い間、倭寇の主体に関する定説となった。

### iii. 1930年代以降の研究

1930年代には、京城帝国大学法文学部による『朝鮮王朝実録』影印の刊行に加え、朝鮮史編修会により刊行された「朝鮮史料叢刊」の中に『海東諸国紀』『保閑齋集』が入り、また『老松堂日本行録』も校注を付して公刊された。このような基本史料の普及を受け、日朝通交秩序に関する研究成果を次々に発表した中村栄孝、貿易史の小葉田淳や森克己など、戦後まで活躍する研究者も登場する。倭寇に関する論文も、「昭和以降飛躍的に増加」〔田中健夫1959〕した。

この時期を代表する倭寇の研究者は秋山謙蔵である。とくに「支那人の倭寇」において嘉靖以後の倭寇の大部分が中国人「無頼の徒」であることを述べ（後期倭寇）と名づけ、南北朝から室町初期にかけて朝鮮半島から中国沿岸を侵寇した（前期倭寇）と一線を画したことは、以後、倭寇の時期区分の定説となった〔秋山謙蔵1934〕。秋山は日中関係を広範に考察しているが、倭寇や西日本各地から朝鮮への通交についての論考からは、その視野が倭寇による人の掠奪および被虜人の送還・売買の問題にも及んでいたことがわかる〔秋山謙蔵1932〕。この被虜人の問題は、戦後の研究者によりしだいに注目されてゆく。秋山の倭寇観は『歴史学研究』に掲載された短文「倭寇」に集約されるが、倭寇を「抗日」と同義としてとらえている点など、当時の日中関係の強い影響をうけていたことは否めず〔秋山謙蔵1935〕、これ以後に書かれる秋山の論著はますますその傾向を強める〔秋山謙蔵1939〕。

海賊研究はこれまで海賊＝海軍または海賊＝倭寇という通俗的理解からなされてきたが、長沼賢海の研究はこれを一新した。長沼は、西日本諸地域の海上勢力について、それぞれの根本史料によってその内部構造を解明しようとした。氏の論考のうち松浦党〔長沼賢海1933〕〔同1935〕や壱岐〔長沼賢海1936〕の論考は、倭寇集団の内側からの考察といえる。また、有馬成甫は、それまで流布していた倭寇の主体が村上水軍であるという説を否定した〔有馬成甫1934〕。

これらに対し中村栄孝は、『海東諸国紀』や『朝鮮王朝実録』をもとに論考を集中的に発表し〔中村栄孝1928〕〔同1931a〕〔同1931b〕〔同1931c〕〔同1931-1932〕〔同1932a〕〔同1932b〕〔同1932c〕、倭寇を克服しつつ日本列島側の諸勢力との通交体制を構築してゆく朝鮮王朝側の動きを実証的に解明、集大成した〔中村栄孝1935〕。中村の研究は、三浦周行が「朝鮮の〈倭寇〉」で触れていた、倭寇から日朝通交秩序確立までの一つ一つの論点を、実証的かつ緻密に解明したものとして評価でき、戦後の中世後期日韓関係史研究の土台となったといっても過言ではない。

社会経済史からの提起もあった。貿易史の森克己は、対元・高麗関係において活動した倭寇を武装商人団と規定した。すなわち、元寇後の元朝官吏の圧力に対する対抗上、平和的貿易ではなく、武力を備えた強行的貿易が必須となり、これが倭寇への導火線となったという見解である〔森克己1934〕。

一方で稲葉岩吉は、倭寇を助長した直接の原因として高麗の軍政面の廢頽を挙げ、その遠因を田制の紊乱に求めた。これに類似した見解は戦後の田中健夫や田村洋幸らに引き継がれる〔稲葉岩吉1935〕。

この時期にはこの他にも多くの論著があるが、日本の本格的な領土拡張という時代状況を受け、倭寇を海外に勇躍するものとして賛美する論調が顕著であった。これらを逐一あげることは省略したい。

## 2. 戦後の研究

戦前の研究と戦後の研究には、不連続面と連続面がある。不連続面とは、いうまでもなく日本の敗戦による価値観の転換である。倭寇を日本の大陸進出の象徴ととらえるような研究姿勢が衰えたばかりか、田中健夫によれば対外関係史研究そのものが沈滞したという。戦後からの研究者は、田中健夫・田村洋幸・長節子らで、たしかに決して多いとはいえなかったが、意欲的かつ継続的に研究成果を発表した。一方、中村栄孝・森克己・小葉田淳・青山公亮ら戦前からの研究者の研究成果の批判的継承によって、日麗・日朝関係の実証的研究が継続深化したことを連続面として評価したい。倭寇に対する視線は戦前とは大きく異なったが、研究が実証的に継続する限りにおいて、戦前と戦後の研究が途絶しているということはない。

1980年頃より戦後国際社会の冷戦構造が変化し、グローバル化・ボーダーレス化が世界的に進むと、対外関係史研究においては海域史という新しい枠組みが提示され、多くの研究者がかかわるようになり、以来研究は長足の進歩を遂げている。倭寇研究も基本的にはその枠組みのもとで行なわれているといつてよい。

### i. 1970年代までの研究

戦前からの研究者としては、中村栄孝・青山公亮・森克己・石原道博・小葉田淳らがいる。中村栄孝は倭寇の根拠地・対馬について実踏をふまえて考察し〔中村栄孝1949〕、青山公亮は高麗辛禡王以降の倭寇と対日外交を論じた〔青山公亮1951〕。戦前から〈後期倭寇〉研究に携わってきた石原道博は倭寇による俘虜（朝鮮人・中国人・日本人）に関する事実を明らかにした〔石原道博1956〕。

戦後、倭寇を含む対外関係史の研究成果を長期にわたり継続的に発表し続けたのは田中健夫である。田中は、まず戦前からの倭寇研究を概観した上で〈前期倭寇〉についての見解をまとめた。田中によれば、朝鮮側で「庚寅以来」脅威となった倭寇の目的は米豆や奴婢の獲得であり、高麗側の廢頽が倭寇の侵掠を助長したという稲葉岩吉の見解を踏襲した。その本質については、森克己の〈武装商人団〉説とはやや異なり、海賊的性格に移行していたことを述べた。すなわち、田中は、朝鮮側が根拠地と考えた三島について「対馬・壱岐・松浦」とした上でやがて瀬戸内海賊にも注目することを述べ、構成要員は「武装商人団」と「海賊群」とし、「海賊群」を経済的に困窮する「細民群」と（松浦党など）常習海賊的性格を有する「海賊衆」とに分けて理解〔田中健夫1950a〕、そして朝鮮王朝に入ると、朝鮮側の海

防策充実・日本への倭寇禁圧要請・倭寇への懐柔によって倭寇がさまざまに変質することを指摘した〔田中健夫1950b〕のである。田中は、これらをもとに〈前期倭寇〉について論じた〔田中健夫1959〕。ただ、ここで留意すべきは、森克己が対高麗・元関係史から〈武装商人団〉説を説き起こし、高麗末における倭寇の活発化に対する具体的な論証を行っていないのに対し、田中健夫は高麗末から朝鮮初期である14・15世紀の倭寇に焦点を定めるなど、〈武装商人団〉説をめぐる論点は必ずしもかみ合っていないと考えられる点である。

同時期に貿易史の観点で日麗・日朝関係に取り組んでいたのが田村洋幸である。田村は倭寇の活動の時期区分を行い、その中で高麗末と朝鮮初期の倭寇の活動を区別した上で、朝鮮初期の倭寇の特徴を王代別に分析したのだが、同論考序文で『世宗実録』28年(1446)10月壬戌条にある判中樞院事李順蒙の上書(以下、「李順蒙上書」)をとりあげ、高麗末の倭寇について「麗末の倭寇はむしろ日本人が主体ではなく、10人中8・9人までは朝鮮人であったと認識されていた」とし、具体的には「禾尺才人とよぶ朝鮮賤民層であることが明白」とする刺激的な提起を行なった。さらに田村は、高麗末の倭寇からは変質している筈の朝鮮初期の倭寇は日本人であったとした。高麗末の倭寇について「李順蒙上書」に着目した点は後の〈倭寇＝高麗・朝鮮人主体説〉につながるものであったが〔田村洋幸1961〕、このことがすぐに論争になることはなかった。田村はさらに朝鮮初期の倭寇の系譜を明らかにすることで朝鮮初期の倭寇の実態に迫った〔田村洋幸1962〕。同様の問題関心では、有光友學も、日朝間を往来する貿易商人という視点で、『海東諸国紀』や『朝鮮王朝実録』に登場する人物を分析している〔有光友學1970〕。

さらに田村洋幸は、前述の〈武装商人団〉説について、高麗時代の倭寇には、〈武装商人団〉であるという史料が見あたらないとした〔田村洋幸1967〕。田村の研究は対馬、北九州、南九州それぞれに視点をおいた対外関係史研究としても評価され〔田中健夫1975〕、対馬宗氏に視点をおく長節子の研究や、博多に視点をおく川添昭二の研究などととも、具体的な地域社会または豪族からみた対外交渉史という性質を持っていた。田村自身、対外関係史研究と国内商業経済史との関連性が必要であり、各地域の豪族の政治的過程と貿易を結びつける努力が学界の方向性となるであろうと述べている〔田村洋幸1992〕。

倭寇の主体論については、稲村賢敷が征西将軍府説を一步進めた。稲村は、征西府と倭寇の「親近なる態度」を指摘し、征西府の配下にあった松浦・菊池両勢力が行った組織的継続的な侵寇としてとらえた〔稲村賢敷1957〕。田村洋幸も、著名な倭寇である早田氏と同姓の豪族が「北松浦郡相浦今福歳宮の社司」にいたること、さらに松浦党が全体的な連盟規約を作成した年が、各々田村のいう倭寇の活動の画期となっていることを述べ、「松浦党が何故盟約を交わさなければならなかったかという事情」に触れている。すなわち、高麗末期からの倭寇と松浦党との関係は否定されてはいないのである〔田村洋幸1967〕。

戦前の秋山謙蔵が触れた倭寇の被虜人の問題については、石原道博が朝鮮人や中国人俘虜の問題を論じた〔石原道博1956〕。有井智徳は、中韓関係すなわち明と朝鮮との関係の考察において、倭寇による中国人被虜人の送還を検討考察した〔有井智徳1985〕。

今日の状況から考えれば、ここまで中世史研究は、一国史(ナショナルヒストリー)的な発想で行われ

ていた。田村洋幸の倭寇主体論をみても、日本人か朝鮮人かという択一を脱していない。対外関係史においては、世界史の側から西嶋定生の冊封体制論(宗主国である中国皇帝と藩属国である周辺諸国首長の中の君臣秩序にもとづく国際関係)が提示されていたが、これとて(隋唐—周辺諸国)間の国際秩序を帰納したものであるとか、特定の国家間の諸関係にのみ注目している等の批判があった。「世界」や「地域」は、国家の集合体として考えられていたのである[村井章介1988]。しかし、長節子や川添昭二らによって地域からの対外関係史が準備されていたことは、国家と国家の関係のみならず、国家と地域あるいは地域と地域の間を追求する、すなわち対外関係を多元的に追求する下地ができていたことになり、この分野における1980年代からの研究の急展開にそなえる準備がすでに整っていたということができる。

## ii. 1980年代以降の研究

1970年代後半以降、網野善彦の「日本論」に代表される社会史への注目を背景とした、ナショナルヒストリー(一国史)批判の潮流が起こる。倭寇および対外関係史の研究は、これにもっとも敏感に反応する。

それは、1980年の塚本学の提言[塚本学1980]に始まる。塚本は、日本は単一民族国家であるという認識はもちろん、東アジアにおける地域概念についても中国民族・朝鮮民族・日本民族などから成り立つという見方をも批判し、「たとえば十五—十六世紀の五島列島と済州島と舟山列島とを包括する倭寇世界を想定したり」「日本海沿岸諸地域」を想定することを提示した。これを受け網野は当時の日本列島の諸地域社会およびその交流に着目した研究を挙げ、日本国を地域史という視角から多元的に追求する必要性を述べた[網野善彦1982]。

研究者が数多く登場するようになるのもこの頃からである。1977年に発足した田中健夫氏を中心とする「対外関係史研究会」、その翌年にスタートした「李朝実録を読む会」からは村井章介・関周一ら多くの研究者が台頭し、関西ではその名も「海域アジア史研究会」がスタートした。「海域アジア史」という名称は、今や市民権を得つつある。そのような中での倭寇研究の歩みをたどる。

網野や塚本の提言以前から、田中健夫は「国境にとらわれない」通交関係の追求を主張していた。田中は1982年刊行の『倭寇—海の歴史—』において、〈前期倭寇〉と〈後期倭寇〉との異質性に着目し、前者を〈14・15世紀の倭寇〉・後者を〈16世紀の倭寇〉とし、その序文では「より広い視野からの、国境にとらわれない海を中心とした歴史観」を標榜した[田中健夫1982]。なお本書において、田中は倭寇の構成について、すでに田村が指摘した「李順蒙上書」を挙げ、構成員に高麗の賤民が参加していることに言及している。

「国境にとらわれない」地域の具体像を提示したのは村井章介であった。村井は、中世日本の国家そのものを多元的にとらえたうえで、日本の周縁地域をそれぞれある程度自立した〈環日本海地域〉〈環東シナ海地域〉としてとらえるという、「研究を進めるための仮説」を提示した[村井章介1985]。村井の提起は、内海に焦点をあてた今日の〈海域アジア史〉という視角につながるもので、その後数多の研究成果を生み、対外関係史はそのような諸地域と国家との関係を解明する方向に展開した([関周一

1994a) および〔橋本雄2003〕に研究史整理)。日本列島および周縁諸地域と朝鮮王朝との交流史研究においては、おびただしい偽使の存在が明らかにされ、研究は新たな段階に入っているといえる〔荒木和憲2007〕〔橋本・米谷2008〕〔関周一2008〕。

倭寇の構成問題においては、ほぼ同時期に発表された二つの論考が論議を呼んだ。まず田中健夫は、〈14・15世紀の倭寇〉について、1350年以降襲撃回数と規模が急激に増えるこの時期の倭寇を日本人のみの海賊集団と考えることには無理があるとした上で、あらためて「李順蒙上書」をとりあげ、「倭寇の主体は倭人の服装をした高麗人で、日本人は10-20%に過ぎなかった」と述べた(〈倭寇＝高麗・朝鮮人主体説〉)。さらに田中は『高麗史節要』の禾尺・才人に関する記述を挙げ、高麗側の底辺民衆および一般の農民を倭寇の主力と想定、これを補強する論拠として高麗の土地制度や身分秩序の混乱を挙げた〔田中健夫1987〕。同じ年に高橋公明は、水賊(「朝鮮人海賊」)具体的には濟州島の海民についての『朝鮮王朝実録』記事に着目し、彼らが倭人と密接な交流があったことを主張、このような濟州島の海民の存在を前提とした〈全羅道－濟州島－北九州〉という交流ルートが存在を検討する必要性を提起した。倭寇との関連においても、濟州島に大量の馬がいたことに着目して、この濟州島と連関する可能性を提起した〔高橋公明1987〕。田村洋幸も従来の見解をすすめ、高麗時代の倭寇発生の原因として、日本側の社会経済的混乱のほか高麗側の土地制度・身分秩序の混乱や軍制の弛緩を挙げ、倭寇猖獗の背景は、高麗民衆の倭寇支持にあるとした〔田村洋幸1990〕。

村井章介は、海域史の立場からこれらに大きな関心を示し〔村井章介1988〕、自ら仮説として示した〈環東シナ海地域〉の一例として、慶尚道の三浦から対馬・壱岐を経て博多に至る地域で活動する倭人を「マージナルマン(境界人)」と呼び、彼らの生活の場である「倭」と「日本」を区別した〔村井章介1993〕。さらに村井は、(古くは後藤秀穂・青山公亮が言及し、中村栄孝が倭寇としての存在を認め、田村洋幸も〈倭寇の初期形態〉として評価していた)1223年から1227年の倭寇について、14世紀以降の倭寇との共通性に着目して〈初発期の倭寇〉と名づけ、承久の乱による日本国内の混乱との連関を指摘した〔村井章介1988〕。佐伯弘次も海賊と倭寇について整理する中で12世紀中期から13世紀前半と時期をひろげて〈初期倭寇〉と呼び、さらに、海賊と倭寇の研究を乖離させるのではなく、統一的に理解することを提唱した〔佐伯弘次1992〕。

〈倭寇＝高麗・朝鮮人主体説〉に対し、浜中昇は朝鮮史研究者の立場から反論を行なった。まず田中が史料的根拠とした「李順蒙上書」を検討し、高麗の民が倭寇を偽装したことは事実だが「倭人不過一二」は高麗人による偽装が多かったことを言うための誇張とみるのが自然であり、高麗の土地制度混乱は『高麗史』編者の立場での見解を述べたものに過ぎず(したがって、必ずしも混乱していたわけではなく)、農民が犠牲になり倭寇に参加したということはいえないと述べた。高橋の指摘についても、濟州島の海民を組織しうるような主体は朝鮮国内には見出しがたく、『高麗史』に登場する大規模倭寇集団の船舶・人員・馬匹いずれも誇張などが入っており、「倭寇は日本人のみの海賊集団である」という考えは必ずしも不自然ではないとした。村井の言う「倭」と「日本」についても、ニュアンスの差はあるが実態は同一であるとした〔浜中昇1996〕。さらに浜中は、「禾尺・才人」について朝鮮側史料に立ち戻って考察を行っている〔浜中昇1997〕。村井章介も、「李順蒙上書」の解釈については行き過ぎを指摘し、田中健夫の解釈に対して慎重な姿勢をとった〔村井章介1997〕。



一方、李領は前期倭寇を〈13世紀の倭寇〉〈倭寇の空白期〉〈庚寅年以降の倭寇〉の3期に時期区分し、〈初発期の倭寇〉である〈13世紀の倭寇〉を詳細に検討してその性格を明らかにした。そして〈倭寇の空白期〉における異国警固・海賊警固を遂行していた少弐氏とその被官宗氏の役割に注目し、庚寅年(1350)の倭寇は北部九州での足利直冬の攻勢に圧倒された少弐頼尚の高麗侵攻が発端であることを主張、それ以降の大規模倭寇の連続は西日本の悪党が南朝方の水軍として動員されていたことと密接に関連するとした。特に倭寇と悪党の戦法の類似に言及するなど、日本側史料に深く切り込む検討が目立った。さらに李領は田中の〈倭寇＝高麗・朝鮮人主体説〉を批判、倭寇は日本人のみの集団であるとした〔李領1999〕。

李領の説は、田中らへの反論であるばかりでなく、戦前からの倭寇の主体論の系譜上にも位置し(李領同様、少弐氏に着目した見解が無かったわけではない〔斎藤満1990〕)、さらには日本側史料に深く切り込みながら倭寇の構成問題を解き明かそうとする韓国側の研究成果の先駆けでもあった(本委員会の金普漢報告「韓国内の倭寇研究の学術史的検討」を参照)。

李領の著書は大きな反響を呼んだ。浜中昇は、少弐氏や南朝方が戦費調達のために主導したという見解や、悪党との関連について評価・支持した〔浜中昇2000〕が、関周一は疑問を呈し〔関周一2000〕、橋本雄は長節子の対馬宗氏に関する研究蓄積〔長節子1987〕を前提に考えると庚寅年(1350)の少弐氏の高麗侵攻にはにわかに賛同しがたいとした(兵糧を求めての侵略行為である点は賛同)〔橋本雄2000〕。倭寇の主体について、橋本は同時期の中国情勢や海域世界の状況をも視野に入れて検討することを提起し〔橋本雄2002〕、関は李領の学説史整理および宗氏と高麗との関係の理解、さらに李領が倭寇の被虜人に言及していないことなどに疑問を呈している〔関周一2000〕。浜中昇は日本人のみの集団であるという点で同一としながら、論証過程にはいくつかの疑義を呈した〔浜中昇2000〕。また、森茂暁は幕府の配下であった少弐氏の勢力ならば、幕府は少弐氏に命じて何らかの措置を講じられたはずなのに、何もできなかった点から考えて倭寇活動に従事した勢力は「少弐氏の指令に必ずしも屈しない、臨機応変に時の支配的な勢力に加担する、自然発生的な性格の強い、もって広範な地域の海上武装勢力」であるとした〔森茂暁2005〕。海津一朗も、あらためて海域世界への注目を主張し、悪党や海賊との同時代的な背景をふまえながら理解するよう述べた。すなわち、悪党も海賊も倭寇も国家の統制区域が近畿～中部地方までしかなかったこの時代において存在した自律的集団であり、それらに国家の統制がかけられたときに浮かび上がるという共通点を持つというのである〔海津一朗2004〕。これらに従えば、倭寇は、海域における自律的集団ということになるだろうか。一方で李領の研究は、従来倭寇の侵攻回数が問題にされていたものが、倭寇の被害と日時を地図上の点に落として、倭寇集団の一連の行動として推測した点を評価された〔橋本・米谷2008〕。

このような一連の論争の一方で、国境にとらわれずに地域・海域に視点を据え、「日朝多元関係」〔関周一2008〕の確立にともない通交者へと変質していった倭寇や倭寇の活動にともなう交流を追求することが、1990年代以降の日本においては研究の主流となった。まず関周一は、倭寇が猖獗する14世紀後半から後期倭寇の時期に相当する16世紀後半までの「朝鮮半島(特に、南岸の三浦や島嶼)～対馬～壱岐～五島列島～九州北部(主に博多)～山陰地域という広がり」を対象とし、人・物・情報の移動または伝播に注目するというアプローチから、地域・海域の具体像をあぶり出した。倭寇そのもの

より、倭寇の被虜人の境遇と本国への送還体制を検討したのである〔関周一2002〕。一方、韓文鍾が朝鮮王朝からの受職倭人をあとづける〔韓文鍾1995〕と、松尾弘毅は壱岐の藤九郎や壱岐の松浦党に着目し、その朝鮮への通交をあとづけた〔松尾弘毅1999〕〔同2002〕のを皮切りに、五島列島や肥前松浦の朝鮮通交者を追った〔松尾弘毅2004〕〔同2006〕。松尾の関心の焦点は、倭寇から朝鮮への通交者へと変質する、いわゆる向化倭人にあったといえる〔松尾弘毅2007〕。さらに荒木和憲は、倭寇の主体の一つであった対馬を宗氏の領国としてとらえ、その支配体制と日朝通交の変遷を追った〔荒木和憲2007〕。

これらの交流史的な研究とは一線を画し、独自に(後期倭寇までも含めて)倭寇研究を行っていたのが太田弘毅である。田村洋幸や田中健夫、浜中昇らが倭寇を偽る高麗人について議論していたのに対し、太田は「ニセ朝鮮人となり朝鮮人を装った」倭寇に照明をあてている〔太田弘毅2002〕。一方、秦野裕介は、『高麗史』や『朝鮮王朝実録』に登場する「倭」と「日本」の用法に着目、「日本」「日本人」とは、室町幕府や征西將軍府を指す言葉であり、「倭」は当時すなわち明代の朝貢システムからの脱落者に張られるレッテルであるとした。当然ここでの「日本」と今日ある国民国家としての日本は大きくずれる。秦野は、そもそも「日本」「日本人」とは何かを議論する必要性を訴えている〔秦野裕介2002〕。

## おわりに

100年余に及ぶ倭寇に関する研究史のアウトラインを駆け足で振り返った。現在日韓両国間での議論の焦点は、倭寇の主体および構成員に関するものである。ここまでの拙い整理をもとに若干の感想を述べて結びとしたい。

1970年代までは、倭寇の構成員が「日本人」なのか「朝鮮人」なのかを、今日の国境線を基準にして考えていた。しかし仮に倭寇の主体を「日本人」だとしても、それは地理的概念としての「日本列島出身者」であるという表現が的確で、日本史における中世後期の「日本」国家との関連を追求するのは簡単ではない。内乱が多く、国家のかたちが前後の時期に比して曖昧であった日本列島中世史の問題だからこそ、今日の国民国家の枠組みは外し、日本列島の中世社会、あるいは日本列島の辺境地域、または日本列島と朝鮮半島の海域における倭寇集団の実態解明こそが、求められる研究視角なのであろう。

「李順蒙上書」や「禾尺才人」をめぐる問題も、このような史料は少なく、しかも「李順蒙上書」は朝鮮王朝建国50年を経たからの史料であるから、これを根拠に〈倭寇＝高麗・朝鮮人主体説〉を主張するのはやはり無理がある。〈前期倭寇〉の主因は日本列島側にあると考えるのが自然であるのだが、大規模倭寇については、それを可能ならしめる別の勢力の関与があったはずである。「李順蒙上書」からも明らかのように、海域での生活者あるいは朝鮮半島側の人物が偽装倭寇として一定の役割を果たしていたことは事実であろう。さらに倭寇が潮流の複雑な朝鮮半島西岸を北上したり、朝鮮半島の内陸深く侵寇していることは、現地の事情に詳しい朝鮮半島側の何者かの関与なしには考えられない。また、太田弘毅が指摘するような「朝鮮人を装った」倭寇の存在を可能ならしめるためには、やはり村井章介が

提示したような、互いの意志疎通が可能な海域世界の存在が前提となるだろう。

このように倭寇の実態は単純なものではなく、その解明は、今日の国境をひとまず外し、地域・海域と当時の国家との関係を複眼で検討しなければならない。その際、日本史のみならず韓国史や中国史の成果もとりいれ、また日韓や日中韓の研究者による合同踏査・合同史料調査のような機会が増えることが、その進展に欠かせないことは言うまでもないだろう。

【付記】末筆ながら、本報告作成にあたり、特に戦前の研究論著収集に際しては、九州大学韓国学研究所勤務（本報告作成時）の原智弘氏に多大なる協力を仰いだことを記し、この場を借りて感謝を申し上げる。

## 【参考文献】

### ① 倭寇および中世後期の対外関係史・日韓関係史の研究史

- 秋山謙蔵「日支交渉史研究の回顧と展望」(同『日支交渉史研究』、岩波書店に所収)、1939
- 田中健夫「日本中世海賊史研究の動向」、『史学雑誌』第68編第2号、1959(のちに同『中世海外交渉史の研究』、東京大学出版会、1959に再録)
- 田村洋幸「中世日朝貿易の基本的性格と研究史の動向」、『経済経営論叢』、1992/6
- 関 周一「中世(対外関係史)研究の動向と課題」、『史境』28号、1994a
- 関 周一「倭寇」(川北稔編『歴史学事典』第1巻交換と消費、弘文堂に所収)、1994b
- 楠木 武「中世日韓関係史研究をめぐって」(歴史教育研究会編『日本と韓国の歴史教科書を読む視点』、梨の木舎に所収)、2000
- 橋本 雄「中世日本対外関係史の論点」、『歴史評論』No.642、2003
- 荒木和憲「中世日朝交流史研究の推移」(同『中世対馬宗氏領国と朝鮮』、山川出版社に所収)、2007
- 関 周一「日朝多元関係の展開」(桃木至朗編『海域アジア史研究入門』、岩波書店に所収)、2008
- 橋本 雄・米谷 均「倭寇論のゆくえ」(同上書に所収)、2008

### ② 研究論著

- 菅沼貞風『大日本商業史』、1892
- 星野 恒「海賊ノ顛末と海軍ノ沿革」、『史学雑誌』第5編4・6・8・9号、1894
- 林 泰輔「応永二十六年の外寇に就きて」、『史学雑誌』第8編第3号、1897
- 中野礼四郎「足利時代に於ける明への倭寇」、『史学雑誌』第8編第10号・第9編第1・2・3号、1897-98
- 久米邦武「海賊と関船」(日本歴史地理学会編『日本海上史論』、三省堂に所収)、1911
- 渡辺世祐「日明交通と海賊」(同上書籍に所収)、1911
- 後藤秀穂「予が観たる倭寇」、『歴史地理』第23巻第5・6号および第24巻1・2号、1914
- 後藤秀穂「最も深く内地に侵入したる倭寇の一例」、『歴史地理』第25巻第1号、1915a
- 後藤肅堂(秀穂)「倭寇の説明するわが国民性の一角」、『史学雑誌』第26編第1号、1915b
- 瀬野馬熊「倭寇と朝鮮の水軍」、『史学雑誌』第26編第1号、1915
- 藤田 明『征西将軍宮』、東京宝文館、1915(のちに文献出版より再版、1975)
- 三浦周行「応永の外寇」、『史林』第1巻第1号、1916
- 三浦周行「朝鮮の(倭寇)」、『史林』第2巻第2号、1917
- (上記2本は、のちに同『日本史の研究』第1輯、岩波書店、1922に再録)
- 後藤肅堂(秀穂)「海国民としての倭寇」、『歴史と地理』第4巻第1号、1919

- 青山公亮「日麗間の高麗」、『史学雑誌』第32編第8・9号、1921
- 三浦周行「応永の外寇の真相」、『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』、弘文堂、1926(のちに同『日本史の研究』第2輯、岩波書店、1930に再録)
- 中村栄孝「文永・弘安両役間における日・麗・元の関係」、『史学雑誌』第37編第6-8号、1926(のちに同『日鮮関係史の研究(上)』、吉川弘文館、1965に再録)
- 青山公亮「高麗高宗朝及び元宗朝の倭寇」、『史学雑誌』第38編第4号、1927
- 後藤肅堂(秀穂)「倭寇風俗考」、『中央史壇』、第14巻2・3・5号、1928
- 中村栄孝「海東諸国紀の撰修と印刷」、『史学雑誌』第39編第8・9号、1928
- 中村栄孝「受職倭人の告身に就いて」、『歴史と地理』、第28巻第1・2号、1931a
- 中村栄孝「倭人上京道路に就いて」、『歴史地理』、第56巻第2号、1931b
- 中村栄孝「太平記に見えた高麗人来朝の記事に就いて」、『青丘学叢』第4号、1931c
- 中村栄孝「室町時代の日鮮交通と書契および文引」、『史学雑誌』第42編10・第43編11号、1931-1932
- 中村栄孝「鮮初の対日関係と浦所の制限」、『朝鮮』201、1932a
- 中村栄孝「鮮初受図書倭人考」、『青丘学叢』第7・8号、1932b
- 中村栄孝「応永の外寇を朝鮮から観る」、『朝鮮』210・211、1932c(上記8本は、同、前掲『日鮮関係史の研究(上)』、1965に再録)
- 秋山謙蔵「〈倭寇〉による朝鮮・支那人奴隷の掠奪とその送還及び売買」、『社会経済史学』第2巻第8号、1932
- 長沼賢海「元寇と松浦党」、『史淵』第7輯、1933
- 秋山謙蔵「支那人の倭寇」、『歴史地理』第63巻第5号、1934
- 有馬成甫「村上水軍と倭寇」、『国史学』第21号、1934
- 森 克己「日宋交通に於ける我が能動的貿易の展開」、『史学雑誌』第45編第2・3・4号、1934
- 秋山謙蔵「倭寇」、『歴史学研究』第3巻第3号、1935
- 中村栄孝、「室町時代の日鮮関係」、『岩波講座日本歴史』3、1935(のちに同、前掲『日鮮関係史の研究(上)』、1965に再録)
- 長沼賢海「松浦党の発展及び其の党的生活」、『史淵』第10・11輯、1935
- 稲葉岩吉「日麗関係」、『岩波講座日本歴史』2、1935
- 長沼賢海「海上交通史上の壱岐」、『史淵』第12輯、1936
- 秋山謙蔵『日支交渉史研究』、岩波書店、1939
- 中村栄孝「ツシマの歴史的位罫」、『日本歴史』第19号、1949(のちに同、前掲『日鮮関係史の研究(上)』、1965に再録)
- 田中健夫「十四・五世紀における倭寇の活動と構成」、『日本歴史』第26号、1950a
- 田中健夫「倭寇の変質と初期日鮮貿易」、『国史学』第53号、1950b  
(上記2本は、同、前掲『中世海外交渉史の研究』、1959に再録)
- 青山公亮「王氏高麗朝の末葉に於ける彼我の外交に就いて」、『朝鮮学報』第2輯、1951
- 青山公亮『日麗交渉史の研究』、明治大学文学部文学研究所、1955

- 石原道博「倭人と朝鮮人俘虜の送還問題」、『朝鮮学報』第9・10輯、1956
- 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』、吉川弘文館、1957
- 田中健夫『中世海外交渉史の研究』、東京大学出版会、1959
- 田中健夫『倭寇と勘合貿易』、至文堂、1961
- 田村洋幸「鮮初倭寇の性格とその変遷」、『鈴峰女子短大研究集報』第8集、1961
- 田村洋幸「鮮初倭寇の系譜について」、『朝鮮学報』、1962  
(上記2本は、同『中世日朝貿易の研究』、三和書房、1967に再録)
- 中村栄孝『日鮮関係史の研究(上)』、吉川弘文館、1965
- 田村洋幸『中世日朝貿易の研究』、三和書房、1967
- 有光友學「中世後期における貿易商人の動向」、『静岡大学人文論集』第21号、1970
- 田中健夫『中世対外関係史』、吉川弘文館、1975
- 塚本 学「日本史は特異なのか—全体会の斉藤報告に関連して」、  
『歴史学研究月報』第248号、1980
- 網野善彦「地域史研究の一視点—東国と西国—」(佐々木・石井編『新編日本史研究入門』東京大学出版会に所収)、1982
- 田中健夫『倭寇—海の歴史—』、教育社歴史新書、1982
- 有井智徳「14・5世紀の倭寇をめぐる中韓関係」(同『高麗李朝史の研究』、国書刊行会に所収)、1985
- 村井章介「中世日本列島の地域空間と国家」、『思想』732号、1985(のちに同『アジアのなかの中世日本』、校倉書房、1988に再録)
- 田中健夫「倭寇と東アジア交流圏」(朝尾・網野ほか編『日本の社会史1 列島内外の交通と国家』、岩波書店に所収)、1987
- 高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流」、『名古屋大学文学部研究論集』史学33、1987
- 長 節子『中世日朝関係と対馬』、吉川弘文館、1987
- 村井章介『アジアのなかの中世日本』、校倉書房、1988
- 斉藤 満「征西府とその外交についての一考察」、『史泉』71、1990
- 田村洋幸「高麗倭寇および初期日朝貿易に関する史的方法論序説」、『経済経営論叢』、1990
- 佐伯弘次「海賊論」(荒野・石井・村井編『アジアのなかの日本史Ⅲ 海上の道』、東京大学出版会に所収)、1992
- 村井章介『中世倭人伝』、岩波新書、1993
- 韓 文鍾「朝鮮前期の受職倭人」、『年報朝鮮學』5、1995
- 浜中 昇「高麗末期倭寇集団の民族構成」、『歴史学研究』No.685、1996
- 浜中 昇「高麗末期・朝鮮初期の禾尺・才人」、『朝鮮文化研究』第4号、1997
- 村井章介「倭寇の多民族性をめぐって—国家と地域の視点から」(大隅・村井編『中世後期における東アジアと国際関係』、山川出版社に所収)、1997
- 李 領『倭寇と日麗関係史』、東京大学出版会、1999
- 松尾弘毅「室町期における壺岐藤九郎の朝鮮通交」、『九州史学』第124号、1999

- 浜中 昇「書評:李領『倭寇と日麗関係史』」、『歴史評論』No.603、2000
- 関 周一「書評:李領『倭寇と日麗関係史』」、『日本歴史』第630号、2000
- 橋本 雄「書評:李領『倭寇と日麗関係史』」、『歴史学研究』No.758、2002
- 関 周一『中世日朝海域史の研究』、吉川弘文館、2002
- 松尾弘毅「中世後期における壱岐松浦党の朝鮮通交」、『九州史学』第134号、2002
- 太田弘毅「朝鮮半島における詐術の形態—倭寇が装った現地人の姿—」、『太田弘毅『倭寇—商業・軍事史的研究』、春風社に所収)、2002
- 秦野裕介「〈倭寇〉と海洋史観—〈倭寇〉は〈日本人〉だったのか—」、『立命館大学人文科学研究紀要』81号、2002
- 松尾弘毅「中世日朝関係における後期受職人の性格」、『日本歴史』663号、2003
- 松尾弘毅「中世日朝関係における五島諸氏と通交体制」、『九州大学COEプログラム(人文科学)『東アジアと日本—交流と変容』に所収)、2004
- 海津一朗「〈元寇〉、倭寇、日本国王」(『日本史講座4 中世社会の構造』東京大学出版会に所収)、2004
- 森 茂暁『南朝全史—大覚寺統から後南朝へ』、講談社選書メチエ、2005
- 松尾弘毅「中世後期における田平・平戸松浦氏の朝鮮通交と偽使問題」、『古文書研究』61号、2006
- 松尾弘毅「朝鮮前期における向化倭人」、『史淵』第144号、2007
- 荒木和憲『中世対馬宗氏領国と朝鮮』、山川出版社、2007